

公立大学法人札幌市立大学
平成27事業年度の業務実績に関する評価結果

平成28年8月

札幌市地方独立行政法人評価委員会

1 公立大学法人札幌市立大学の年度評価の方法

- (1) 年度評価は、「項目別評価」及び「全体評価」により行う。
- (2) 項目別評価は、各事業年度における中期計画（年度計画）の次に掲げる事項（大項目）の進捗状況の確認又は評価を行う。
- ① 大学の教育研究の質の向上
 - ② 地域貢献、国際化、大学間連携
 - ③ 業務運営の改善及び効率化
 - ④ 財務内容の改善
 - ⑤ 自己点検・評価
 - ⑥ その他業務運営
- (3) 項目別評価に当たっては、まず、公立大学法人から提出された業務実績報告書等を検証し、年度計画の記載項目ごとの事業の進捗状況について、次に掲げるⅠ～Ⅳの4段階で評価を行う。公立大学法人による評価と評価委員会の評価が異なる場合は、その理由等を示す。
- Ⅳ：年度計画を上回って実施している。
Ⅲ：年度計画を十分に実施している。
Ⅱ：年度計画を十分には実施していない。
Ⅰ：年度計画を実施していない。
- (4) (3)の結果等を踏まえ、年度計画の大項目ごとに、事業の進捗状況について次に掲げるS～Dの5段階で評価を行う。
- なお、評価に当たっては、事前に設定した重点的に評価する小項目の実施状況を勘案した評価を行うことができる。
- S：特筆すべき進捗状況にある（評価委員会が特に認める場合）
A：計画どおり進捗している（すべてⅣ又はⅢ）
B：おおむね計画どおり進捗している（Ⅳ又はⅢの割合が9割以上）
C：やや遅れている（Ⅳ又はⅢの割合が9割未満）
D：重大な改善事項がある（評価委員会が特に認める場合）
- (5) 全体評価は、項目別評価の結果等を踏まえ、中期計画（年度計画）の進捗状況全体について、総合的に評価を行う。

2 全体評価

(1) 総評

平成 18 年 4 月に開学した公立大学法人札幌市立大学は、平成 21 年度に学部が完成し、平成 22 年 4 月には、デザイン研究科と看護学研究科の大学院博士前期課程、平成 24 年 4 月には大学院博士後期課程を設置し、間断なく大学を発展させている。開学時より、デザインと看護に共通する「人間重視」の考え方を常に基本として高度な教育研究を行っており、デザイン分野と看護分野における有為な人材の育成・輩出と地域に根ざした公立大学として、一層の地域貢献が期待されている。

平成 27 事業年度の業績評価としては、「項目別評価」の結果では、全ての項目で A 評価（計画どおり進捗している）となっており、年度計画の小項目ごとの評価からも、全体としては、行うべき事業を行い、順調に業務を遂行していると評価できる。

項目別評価の基礎資料となる公立大学法人札幌市立大学が策定した平成 27 事業年度の年度計画の記載項目（小項目）ごとの評価（小項目評価）においては、小項目数 56 項目のうち、10 項目がⅣ評価（年度計画を上回って実施している）、46 項目がⅢ評価（年度計画を十分に実施している）となっている。このうち、本評価委員会においては、小項目 13、15、19 及び 21 においては、Ⅳ評価（公立大学法人札幌市立大学はⅢ評価）とし、小項目 14 においては、Ⅲ評価（公立大学法人札幌市立大学はⅣ評価）とし、小項目数 56 項目のうち、13 項目がⅣ評価（年度計画を上回って実施している）、43 項目がⅢ評価（年度計画を十分に実施している）となり、全ての項目が年度計画実施の水準を満たしている。なお、公立大学法人札幌市立大学による評価と評価委員会の評価が異なる理由については、(2) 年度計画の大項目ごとの評価の主要なポイントに記載する。

また、毎年度の詳細な年度計画の策定や自己評価の実施に加え、これに対する評価委員会の評価等を踏まえつつ、大学業務全般にわたって様々な取組を推進していることが、平成 27 事業年度に係る業務の実績に関する報告書（以下「報告書という」）からも伺える。

(2) 年度計画の大項目ごとの評価の主要なポイント

ア 大学の教育研究等の質の向上

オープンキャンパス、進学相談会等は計画通り順調に実施されており、オープンキャンパス参加者数が平成 25～27 年度には約 1,300～1,400 人で推移していることは高く評価できる。（小項目 8）

学部学生の授業評価、卒業・修了時の学生アンケート、入学者アンケート等さまざまな学生に対するきめ細かいアンケートを実施していることは、他大学と比較してユニークな取組であり、高く評価できる。（小項目 13）

FD 研修会は、開催目標を上回る 18 回を開催したことは評価できるものの、FD 研修会への参加者総計が、平成 25～27 年度で、約 840→710→480 人と急減しており、とくに他学部開催の場合に参加者が少ないことや参加者が 0 名の研修会もあったため、参加者数を増加させる取組を講じる必要があると考えられる。今後は、FD 活動

への参加者数も「成果指標」に加えることが望ましい。(小項目 14)

デザイン学部において、OG・OB 講演会の開催、グループ内 5 大学連携による「マッチング・イベント」開催やワークショップ型インターンシップ体験講座等、企業見学バスツアーなどキャリア支援に関連するイベントを開催し、多くの成果をあげたこと等は高く評価できる。また、看護学部において、看護コンソーシアム会議を継続し、地元医療機関施設の意見交換会・討論会を開催したことやシャトル研修の実施等によりスキルアップトレーニングを実施したことは高く評価できる。(小項目 15)

デザイン学部と看護学部の協働は本学最大の特徴であり、両者の共同研究が順調に進められているとともに、外部機関との共同研究が発展的に取り組まれており、成果発表会も活発に行われていることは高く評価できる。(小項目 19)

学術奨励研究費において 9 件の学会発表を採択したこと、また学術奨励研究費以外の国際学会発表が 6 件であったことは、活発な海外研究発表実績として高く評価できる。また、「学術論文掲載料等補助」において、1 件あたりの上限額を 5 万円から 15 万円に引き上げたことは、国際発表を促進するものとして評価できる。(小項目 21)

受託研究等に 23 件の申込みがされており、地域連携研究センターの活動が順調に機能していることが伺えるとともに、産学連携に係る地域連携研究センターの機能強化を図るために、地域連携専門員が様々な支援を行うことで効果を上げていることは高く評価できる。(小項目 22)

イ 地域貢献、国際化、大学間連携

教員の研究成果の公表において、まちづくりに貢献した事例数は 169 件であり、成果指数 100 件以上を大幅に上回ったこと、121 件(平成 25 年度)→125 件(平成 26 年度)→169 件(平成 27 年度)と急増したことは高く評価できる。(小項目 25)

公開講座の実施件数が、COC 企画を中心に、11 件(平成 26 年度)から 54 件(平成 27 年度)と飛躍的に増加し、受講者の満足度も 5 段階評価で 4.47(平成 26 年度)から 4.56(平成 27 年度)に向上したこと並びに 8 件の連携講座を開催したことは高く評価できる。(小項目 26)

公開講座の体系を、大項目として「一般市民向け」「専門職向け」、中項目として「デザイン分野」「看護分野」「学際分野」、小項目として「4 コース 9 領域」「共通教育」に分類して構造化し、54 件の公開講座を開催した努力は高く評価できる。また、公開講座の実施件数の増加に対応して、受講者数も 525 人(平成 26 年度)から 1,706 人(平成 27 年度)に飛躍的に増加したことは高く評価できる。(小項目 27)

平成 25 年度に「大学の国際化に関する方針」と「行動計画」を策定して以降、留学生の派遣・受入総数が増加し、78 人(平成 26 年度)、75 人(平成 27 年度)と高水準で安定していることは高く評価できる。(小項目 30)

ウ 業務運営の改善及び効率化

再編された「企画室」において、理事長(学長)のリーダーシップの補佐がより強

化されるとともに、第二期経営戦略の着実な実行を期待する。(小項目 34)

大学ウェブサイト全面リニューアルによる効果（アクセス数増加、認知度・満足度アップ等）を測定・分析し、戦略的に情報発信力が強化されることを期待する。

(小項目 40)

学長を中心に各委員会や会議を行うことで問題を解決されており評価できる。業務運営の改善及び効率化を進めているが、これは終わりのないテーマなので手を抜くことなく、今後も進めることを期待する。

エ 財務内容の改善

中期計画から1年前倒しでの基金設置は、取組の積極性という点で評価できる。今後は、原資である寄附金の効果的な獲得方法の検討及び基金の適切な運用を期待する。(小項目 43)

オ 自己点検・評価

引き続きPDCAマネジメントサイクルによる進捗管理を行うことを期待する。(小項目 45)

カ その他業務運営

文献検索ガイダンスを行うことにより参加者が増加している。今後も継続しながら学生が参加しやすい方向性を探ることを期待する。(小項目 51)

(3) 今後の課題

多くの項目で「成果指標」が未設定であるが、「成果指標」は計画の進捗状況の評価の前提となるので、中期目標期間後半及び次期中期目標期間においては特に、適切な指標の設定が必須である。その際、指標は数値目標に限らず、質的な成果については、ルーブリック（測定したい目標に関し、どのような成果を上げれば目標達成のレベルがどの程度になるかを文章で示した判定基準）の形式を用いることも考えられる。

また、「成果指標」が設定されている場合でも、中期目標期間前半における成果を踏まえて見直し、適切な指標を設定し直す必要がある。

3 項目別評価

3-1 大学の教育研究の質の向上に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を上回って実施している (IV評価)」又は「年度計画を十分に実施している (III評価)」と評価されたことから、A評価 (計画どおり進捗している) とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
23	0	0	16	7	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 年度計画を上回って実施している項目として、次のものがあげられる。

オープンキャンパス、進学相談会等は計画通り順調に実施されており、オープンキャンパス参加者数が平成 25~27 年度には約 1,300~1,400 人で推移していることは高く評価できる。(小項目 8)

学部学生の授業評価、卒業・修了時の学生アンケート、入学者アンケート等さまざまな学生に対するきめ細かいアンケートを実施していることは、他大学と比較してユニークな取組であり、高く評価できる。(小項目 13)

デザイン学部において、OG・OB 講演会の開催、グループ内 5 大学連携による「マッチング・イベント」開催やワークショップ型インターンシップ体験講座、企業見学バスツアー、また従来からの企業実習 (インターンシップ) などキャリア支援に関連するイベントを開催し、多くの成果をあげたこと等は高く評価できる。また、看護学部において、文部科学省の補助事業が終了した後も、看護コンソーシアム会議を継続し、地元医療機関施設の意見交換会・討論会を 5 回開催し、延べ施設数 31 カ所、延べ人数 84 名が参加したこと、シャトル研修の実施や卒業生をインストラクターとして招聘し、スキルアップトレーニングを実施したことは高く評価できる。(小項目 15)

デザイン学部と看護学部の協働は本学最大の特徴であり、両者の共同研究が順調に進められているとともに、外部機関との共同研究が発展的に取り組まれており、成果発表会も活発に行われていることは高く評価できる。(小項目 19)

学術奨励研究費において9件の学会発表を採択したこと、また学術奨励研究費以外の国際学会発表が6件であったことは、活発な海外研究発表実績として高く評価できる。また、「学術論文掲載料等補助」において、1件あたりの上限額を5万円から15万円に引き上げたことは、国際発表を促進するものとして評価できる。(小項目21)

受託研究11件及び研究支援目的寄付金11件等の申込みがされており(計23件)、地域連携研究センターの活動が順調に機能していることが伺えるとともに、産学連携に係る地域連携研究センターの機能強化を図るために、地域連携専門員が様々な支援を行うことで効果を上げていることは高く評価できる。(小項目22)

平成27年度のサテライトキャンパスの利用は302件であり、このうち本学と学外機関との連携の場としての利用は205件(67.9%)であったことは、サテライトキャンパスが本学と学外機関との連携の場として有効に機能していると高く評価できる。公開講座や産学連携の会場での使用に加え、学外者を含む教育・研究を目的とする大学連携の場として活用されており評価できる。(小項目23)

(イ) その他、次に掲げる点が注目される。

デザイン分野と看護分野の横断型連携及び共通教育科目について、卒業時のアンケートを継続的に分析し、各学部のディプロマポリシーで求める「地域社会に対応した提案ができる」を達成するために、COC事業の成果である学部連携基礎論や地域プロジェクトを両学部専門科目に追加した新カリキュラムを28年度から導入したことは高く評価できる。(小項目1)

博士後期課程の完成後2年目までの学位取得状況を確認し、平成24年度入学者は平成28年3月までに、デザイン研究科では3人が学位を取得し、未取得で退学した1人には早い時期に取得を目指すよう指導していること、看護学研究科では長期履修(4年)の1人が学位を取得し、長期履修(5年)の4人は準備を継続していることが確認できた。順調な学位取得は、入学者の確保のためにも重要な要素となるので、適切な指導が望まれる。(小項目3)

全科目の成績評価の検証が行われ、教務・学生連絡会議で確認されたことは、開かれた大学としての取組として高く評価できる。(小項目12)

COC事業において、デザイン学部・看護学部両学部の学生・教員と地域の方々との新しい関係が築かれていて、他大学にはない特徴的な教育がなされている。(小項目20)

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

博士学位取得状況について、適切な「成果指標」を設定して継続的に点検する必要がある。(小項目3)

「実践英語、国際事情を学ぶ新共通教育科目の導入」については、検討の結果、共

通教育科目については開講科目の変更は行わず、授業内容の変更に留まるのであれば、中期目標期間後半においては、中期計画の見直しを含めて再検討し、取組の実情に合った年度計画と成果指標を策定する必要がある。(小項目 4)

オープンキャンパス受入計画数の「成果指標」は、参加者数の最近の実績に見合ったものとするべきである。(小項目 8)

そのほかにも、多くの項目で「成果指標」が未設定である。「成果指標」は計画の進捗状況の評価の前提となるので、中期目標期間後半及び次期中期目標期間においては特に、適切な指標の設定が必須である。その際、指標は数値目標に限らず、質的な成果については、ルーブリック（測定したい目標に関し、どのような成果を上げれば目標達成のレベルがどの程度になるかを文章で示した判定基準）の形式を用いることも考えられる（小項目 4、5、7、9、10、11ほか）。また、「成果指標」が設定されている場合でも、中期目標期間前半における成果を踏まえて見直し、適切な指標を設定し直す必要がある。

FD 研修会は、開催目標を上回る 18 回を開催したことは評価できるものの、FD 研修会への参加者総計が、平成 25～27 年度で、約 840→710→480 人と急減しており、とくに他学部開催の場合に参加者が少ないことや参加者が 0 名の研修会もあったため、参加者数を増加させる取組を講じる必要があると考えられる。今後は、FD 活動への参加者数も「成果指標」に加えることが望ましい。(小項目 14)

デザイン学部の創造性の高い教育や研究活動が、横断型連携や共通教育科目を通して、看護学部の教育や研究活動に効果的な影響をもたらしていると思われる。看護コンソーシアム会議を継続していることは評価できる。今後は、隣接する市立札幌病院とのコンソーシアムについては、これまでの実績を踏まえて、強固なコンソーシアムの構築に向けた取組が推進されることを期待する。(小項目 15)

本学の特徴はデザイン学部と看護学部との協働にある。両学部を結びつける学生の交流、教員の FD 研修会、懇親会など、多くの機会を通じて、学生・教職員、大学が一体となって、教育・研究が協働して、一層の成果を上げるべく行動していただきたい。

3-2 地域貢献、国際化、大学間連携に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を上回って実施している (IV評価)」又は「年度計画を十分に実施している (III評価)」と評価されたことから、A評価 (計画どおり進捗している) とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
9	0	0	5	4	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 年度計画を上回って実施している項目として、次のものがあげられる。

「複合的な地域課題の解決に積極的に取り組む」という中期計画に基づき、教員の研究成果の公表において、まちづくりに貢献した事例数は169件 (デザイン学部103件、看護学部66件)であり、成果指数100件以上を大幅に上回ったこと、平成25年度121件→平成26年度125件→平成27年169件と急増したことは高く評価できる。(小項目25)

公開講座の実施件数が、COC企画を中心に飛躍的に増加し (平成26年度11件→平成27年度54件)、受講者の満足度も5段階評価で平成26年度の4.47から平成27年度は4.56に向上したこと並びに8件の連携講座 (ちえりあ6件、北海道立総合研究機構2件) を開催したことは高く評価できる。(小項目26)

公開講座の体系を、大項目として「一般市民向け」「専門職向け」、中項目として「デザイン分野」「看護分野」「学際分野」、小項目として「4コース9領域」「共通教育」に分類して構造化し、54件の公開講座を開催した努力は高く評価できる。また、公開講座の実施件数の増加に対応して、受講者数も飛躍的に増加した (平成26年度525人→平成27年度1,706人) ことは高く評価できる。(小項目27)

平成25年度に「大学の国際化に関する方針」と「行動計画」を策定して以降、留学生の派遣・受入総数が増加し、平成26年度78人、平成27年度75人と高水準で安定していることは高く評価できる。(小項目30)

(イ) その他、次に掲げる点が注目される。

地域貢献が着実に積み上げられていること、その一方で国際化を目指してさまざまな活動を繰り広げるための努力がなされている。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

「成果指標」に公開講座の実施件数を加えるべきである。(小項目 26)

「成果指標」に公開講座の受講者数を加えるべきである。(小項目 27)

「成果指標」は派遣・受入総数の現状に見合ったものに変更するべきである。(小項目 30)

ここでも、多くの項目で「成果指標」が未設定である。中期目標期間後半及び次期中期目標期間においては特に、適切な「成果指標」の設定が必須である(小項目 24、27、29、31、32)。また、「成果指標」が設定されている場合でも、中期目標期間前半における成果を踏まえて見直し、適切な指標を設定し直す必要がある。

地域貢献や国際化における今後のさらなる発展のための努力が期待される。

3-3 業務運営の改善及び効率化に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
8	0	0	8	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目はない。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

再編された「企画室」において、理事長(学長)のリーダーシップの補佐がより強化されるとともに、第二期経営戦略の着実な実行を期待する。(小項目 34)

大学ウェブサイト全面リニューアルによる効果(アクセス数増加、認知度・満足度アップ等)を測定・分析し、戦略的に情報発信力が強化されることを期待する。(小項目 40)

学長を中心に各委員会や会議を行うことで問題を解決されており評価出来る。業務運営の改善及び効率化を進めているが、これは終わりのないテーマなので手を抜くことなく、今後も進めることを期待する。

3-4 財務内容の改善に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を上回って実施している (IV評価)」又は「年度計画を十分に実施している (III評価)」と評価されたことから、A評価 (計画どおり進捗している) とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
4	0	0	3	1	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 年度計画を上回って実施している項目として、次のものがあげられる。

中期計画から1年前倒しでの基金設置は、取組の積極性という点で評価できる。今後は、原資である寄附金の効果的な獲得方法の検討及び基金の適切な運用を期待する。(小項目 43)

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

科学研究費補助金獲得に向け、継続的に熱心な申請支援策が採られている。今後も「体制整備等自己評価チェックリスト」に基づき、適切な管理下で、外部資金獲得額の増加が図られることを期待する。(小項目 42)

3-5 自己点検・評価に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評 価 結 果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
3	0	0	3	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目はない。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

引き続きPDCAマネジメントサイクルによる進捗管理を行うことを期待する。(小項目 45)

3-6 その他業務運営に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を上回って実施している (IV評価)」又は「年度計画を十分に実施している (III評価)」と評価されたことから、A評価 (計画どおり進捗している) とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
9	0	0	8	1	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 年度計画を上回って実施している項目として、次のものがあげられる。

文献検索ガイダンスを行うことにより図書館利用者が増加している。今後も継続しながら学生が参加しやすい方向性を探ることを期待する。(小項目 51)

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

キャンパス活用等に関する「プラン素案」策定に際しては、財源が確保されていることが前提となることから、「プラン骨子」に比べ、具体的な数値が盛り込まれることを期待する。(小項目 52)

危機管理マニュアルの策定にとどまらず、実効性確保のために、発生を想定した事前訓練についても検討の余地がある。(小項目 53)